

金栗四三さんはどんな人？

日本人最初のオリンピック選手（マラソン）で、健康マラソンの普及や箱根駅伝の発案をはじめ、日本陸上界の礎を築かされました。また、日本へ新たなスポーツ文化を取り入れられたほか、女子体育の振興にも力を注がれました。

オマケ付の赤いキヤラメルの箱に描かれたゴールインするランナーの絵のモデルや、熊本県民総合運動公園陸上競技場の愛称「KKウイング」のKKは、熊本や九州、それに金栗さんの頭文字を表しています。

金栗さんは、国内はもとより、世界に知られ愛されたランナーだったのです。

金栗さんの持つ数々の記録

日本人で初めてオリンピック出場（通算3回）

第5回ストックホルム大会・第7回アントワープ大会・第8回パリ大会）

マラソン世界最速記録 54年8ヶ月6日5時間32分20秒3
3度の世界記録を樹立 2時間19分20秒3（最高タイム）

和水が生んだ

オリンピック・マラソン王

金栗四三



受賞した賞など

大日本体育協会から功労賞・熊本県近代文化功労者・勲四等旭日小綬章・紫綬褒章・熊日社会賞・朝日文化賞・西日本文化賞・玉名市名誉市民・和水町名誉町民

マラソン世界最速記録が出た経緯は？

金栗さんは明治45年に開催されたオリンピック・ストックホルム大会のマラソンに初出場。参加者68名中34人がリタイアし、倒れた翌日亡くなつた選手もいたほど酷暑の中での過酷なレースでした。その暑さに加え、レースまでの慣れない異国での生活、レース当日迎えの車が来ず会場まで歩いていきながら飛ばすという初めてのレース展開での焦り、コースが舗装道路だったことなどいろいろな悪条件が重なりレース途中で意識朦朧となり、地元銀行家のベトレー家の献身的な介護を受け、5日後に帰国の途に就きました。

レース途中棄権の意思が伝わらず、「行方不明」扱いにされていましたが、大会55周年祝賀行事に招待されてゴールしました。

金栗四三さんの生き立ち



ゴールする金栗四三さん

明治24年 8月20日、玉名郡春富村（現和水町）で誕生（父親が43歳の時に生まれたので四三と命名）

明治30年 吉地尋常小学校（現春富小学校）入学

明治34年 玉名北高等小学校（現南関町・南関第三小学校）入学（往復12kmの道のりを毎日走つて通学）

明治38年 旧制玉名中学校（現玉名高等学校）入学（クラスで1、2番の優秀な成績で特待生として授業料免除）

明治43年 東京高等師範学校（現筑波大学）入学、校長の嘉納治五郎と出会い陸上を始める

明治45年 第5回オリンピック・ストックホルム大会に出場（日本人初）
（棄権の意思が伝わらず「行方不明」扱いとなる）

大正元年 千葉館山で暑中トレーニング

大正3年 東京高等師範卒業、研究科へ

池部家（玉名市）の養子となり春野スヤと結婚（終生「金栗」と名乗る）

大正6年 独逸学協会中学校に移る。高地トレーニングを始める

大正6年 富士登山マラソン競争

大正9年 第1回東京箱根間往復駅伝競走企画

大正9年 第7回オリンピック・アントワープ大会に出席 16位

大正10年 女子体育の振興の必要性を感じ東京女子師範学校へ奉職

大正13年 第8回オリンピック・パリ大会に出席 意識不明となり棄権

昭和11年 日本初のオリンピック開催準備に奔走するも、翌年東京大会返上決定

昭和16年 青葉高女へ移り女子体育振興に努める

昭和21年 熊本県体育会をつくり、初代会長に就任（現熊本県体育協会）

昭和22年 第1回金栗賞朝日マラソン熊本市で開催、（現福岡国際マラソン大会）

昭和23年 熊本県初代教育委員長に就任

昭和24年 西武マラソン20キロ大会佐世保で開催

昭和27年 九州1周駅伝計画

昭和28年 第57回ボストンマラソン日本監督になる

昭和32年 熊日30キロ招待マラソン開催（現熊日30キロードレース）

昭和34年 第11回西部マラソン30キロ大会玉名市で開催（現金栗杯玉名ハーフマラソン大会）

昭和35年 第15回国民体育祭熊本で開催、最終聖火ランナーとして走る

昭和44年 県立玉名高等学校に金栗四三デロンズ像除幕

昭和47年 熊本走ろう会を発足し、初代名誉会長となる

昭和58年 92歳で永眠。